慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 在フィリピン・スペイン系イエズス会士の日本布教志向(中) |
| Sub Title | Aspiracion a la Evangelizacion de Japon, por los Jesuitas Espanoles en las Filipinas |
| Author | 柳田, 利夫(Yanaguida, Toshio) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1991 |
| Jtitle | 史学 (The historical science). Vol.60, No.4 (1991. 7) ,p.115(519)- 137(541) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 論文<br>特集対外交渉史 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910700-0115 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 在フィリピン・スペイン系イエズス会士の日本布教志向（中）

柳田利夫

## 六　フィリピンからの報告Ⅲ

アロンソ・サンチェスが二度めの中国行きから帰ると、サンチェスの情報をもとに、フィリピンから中国・日本への布教の可能性について再び議論が交わされた。中国・日本への布教を強く主張するスアーレスは、サンチェスによる否定的な情報を受けながらも一五八五年六月一二日付で次のように総会長アクワヴィーヴァに書き送っている。

アロンソ・サンチェスは国王がマカオに対して宣誓を行なった機会に、当地にいる会員はこちらでは担当する事がないので、更に前進できるかどうかを調べるためマカオ市に渡りました。これら全てに関して猊下並びにヌエバ・エスパーニャ管区長に対して次のように書き送られております。すなわち、『こちらでは現地人に対して為すべきことがない。なぜなら、平定されているところに関しては托鉢修道会士や在俗司祭達によって教化が行なわれており、もし教化を行えるところがあったとすれば、イロコスとカガヤンの二つの地方であった。一方は不健康なところで、あちらに渡った托鉢修道会士は病気になるか死んでしまった。もう一方は、未だに完全に平定されているわけではないし、既に托鉢修道会士が担当している。スペイン人に関しては、一層為しうるところは少ない。なぜなら三〇〇人くらいが町にいるが、これらに対して既に二つの修道院がある。また主要な教会には

司教とともに在俗司祭がおり、そこに告解のために通常は人が集まる。我々のカーサには、良心問題に caso de conscienciaついて決定するためにやって来るだけであり、我々は、教会関係者と、世俗のことを統治している者との間の和解をとりつけたりしているだけである』と。しかし、少なくとも（ヌエバ・エスパーニャ）管区長はこういった書簡を受け取り、（他会士や在俗司祭達が）何もできないでおり、イエズス会士はなおさらそう（為すべきこともなくすごしている）であろうとわかっていながら、昨年更に四人の会員をこちらに派遣してきました。このことは、ポルトガル人パードレが東インド経由で行なっているように、スペイン人パードレも日本・中国・モルッカ諸島に向かう道を開く、という我々の方針を猊下が正当なものと見做してくださっていると考える以外には理由が見あたらないことでありました。しかしこのことにつき、アロンソ・サンチェスは、彼自身が経験してきたところから、かなり困難なことであると思っております。なぜなら、ポルトガル人パードレは、彼らのもの以外の新たな扉を開けようとはしないであろうからであります。前述の地域に働きにやって来る者は、リスボンから彼らのやり方にあわせられ、ゴアからマラッカ、そこからマカオへ、そして更に日本やモルッカへと、彼らが他の管区から持ってきたもの全てから「清めて」ゆくというのがポルトガル人のやり方であるからで、ポルトガル人の生活のやり方に合わせない者は更に先に進むことを許されないのであります。従って、こちらからマカオへ行く恒常的な道を開くよう努める理由はなく、日本でしなければならないことのために必要な人員が東インド経由で毎年派遣されるよう努めているのであります。中国への道は未だ開かれてはおらず、武力をもってでなければ福音が広められるようなことはないと考えられております。そして彼は、マカオで司教やイエズス会会員達と開いたと言われている会議の経験から、その理由を猊下も御承知のように、これを実行するための極めて正当な理由があると言っています。また、ミカエル・ルッジェリオが幸先よく、成果を期待しつつ中国での布教を開始してはおりますが、多大の苦労と教化を行いながらも、現在のような状況ではそれが前進できるとは思われないとも言っております。哀れなパードレはいまのところ彼を援助するパードレを期待できず、既に獲得したところを維持して行くことで精一杯でありましょう。なぜなら、中国人は自分達の国に異人を受け

入れることに関して非常に疑い深いので、大勢がキリスト教徒になることを望んでおり、その中の一人の学者は大きな成果をもってキリスト教徒になっているにもかかわらず、万一、彼（ルッジェリオ）が援助を求めたことが分かれば、彼を追放してしまうでありましょう。他方ポルトガル人にとっても少なからざる不都合となります。なぜなら、彼らも自分達の国に固執しており、フェリーペ国王の支配下から逃れられると未だに信じているからであります。彼らは、他の東（インド）のことと同様に自分達だけに権利があり、決して他の国に対してそれは認められないと考えております。以上を総合すれば、我々会員が当地に留まることも、また前進することも適当ではない、という結論になります。また、後退することも、国王が我々をここに派遣し、かつ維持するのに莫大な金を使ったので、同様に批判されることになりましょう。このことに関して私の考えるところは次のことであります。

第一に、当地に現在いるほど大勢の会員、即ち、五人のパードレと三人のイルマンとがおり、更に他の者が渡来するのではないかと恐れていますが、こちらに滞在することは適当ではありません。なぜなら、我々が現地人に対してできることはほとんどないことは事実だからであります。この諸島全てに人々が住んでいるというわけでもありません。また、帰服しているのはごく少数の人々で、むしろ、毎日のようにすでに帰服している人々や、その地を通ろうとするスペイン人達を殺害したり、物を奪ったりしているというニュースが届いています。（中略）この町（マニラ）では居住しているインディオに対し何がしかのことをすることができますが、そのために我々は彼らの言葉の学習を開始しております。もっともこれは、一番広く通用する言葉ではありますが、他の島（？）の言葉とは違うものです。しかしながら、この町で前進することはできません。というのは、当地にある二つの修道院に（原住民は）分けられていて、托鉢修道会士達は担当している人々に熱中しており、彼らなりのやり方で教育をしていますので、他の者が介入するのを許そうとはしないからであります。スペイン人に対しては、我々は土地が新しく、征服によって非常に血に塗られており、かなりの量にのぼるポルトガル人・現地人・中国人・スペイン人といろいろな国籍のものによっている貿易や商品などから生ずる多くの困難な問題を解決してやっております。また、僅かな者に対して告解を聴い

たり、説教をしたりしていますが、教義を教えたり、ペニテンシアの規則や身を慎み告解を行い良心を整える方法などの方がより必要であり、これらはとても骨の折れることであります。我々は精々、スペイン人の間や、司教とアウディエンシアの間、統治を行なっている者達の間、あるいは同じアウディエンシアの者同志の間の和解をとりもちに赴き、更に、この新しい植物を根こそぎ駄目にしてしまわないようにして、より良い方向へ進ませるために提起される重大な問題につき、司教が開催する会議に出席しに行くだけであり、それ以外のことはしてはおりません。

第二点は、当レジデンシアには三、四人がいれば十分ではありますが、全面的に放棄するべきではないと思われます。というのは既に述べたところに従事しており、万一全てから我々が手を引けば、（フィリピンを）軽んじているという批判を加えられることになります。もし国王が中国への企てを断固として実施するよう決意し、万一、我々会員が必要になるような場合には、それらを受け入れ、こちらにいる者が経験を積んで、あらゆる事柄に関して適当なを助言することができることになります。また中国の国王が完全に布教への扉を開けるような時には、こちらがその扉になるでありましょう。更に最後に、我々に対して国王が与えた大金を無駄にしてしまったなどといったようには思われないでありましょう。

第三点は現在のように大勢がいることは不適当であるとしても、既に述べましたように後退するのも不適当でありますので、せめて四人が（もしそれを望めば）前進する必要があると思われます。これらは特別のケースであって、（これから恒常的な途が開かれるのではないので）、彼らはマカオに留まることができるでありましょう。[1]

これに続けて、スアーレスは第四点として、フィリピンに残留する者が、chincheo あるいはその他の中国人の言葉を学習し、毎年フィリピンに渡来する中国人商人達を援助することを主張している。その後、この書簡で彼は、マラッカ・マカオのポルトガル人会員について、貿易に介入し、華美に着飾り、互いに贈り物を交換していると批判し、日本にいる会員も「俗的な便宜・訪問・世俗的な交渉・交易、表面的には重大と思われるが、実は俗的なことなので宗教の真実の重大さを汚すことになるようなことに手を染めているといった、いくつかの点

においてひどく弛緩してきているのではないかと危惧しています[2]」と書き送っている。結局スアーレスは、サンチェスがもたらしたフィリピン経由でのスペイン人イエズス会士の中国・日本への入国志向に対する否定的な情報を得たのちも、少なくとも現在フィリピンにいる者の内四人はマカオに向かうことができるという見解を持ち続け、それを総会長に披瀝したことになる。そして、万一、中国での改宗事業が可能になればフィリピン経由でのイエズス会士の派遣もまた重要になってくる、と主張しているのである。彼はそれにとどまらず、中国や日本にいるポルトガル系会員が世俗的な事象に介入していることへの批判も展開していった。この点に関しては、サンチェスと全く同意見で、スペイン系イエズス会士の批判は、他の修道会士が日本イエズス会に対して展開したものと軌を一にするものであったと言えよう。そしてまた、この批判は日本布教志向と根底で繋がっている点においても同様であった。当のスアーレスはこの書簡だけでは満足せず、翌日も総会長にほぼ同趣旨の書簡を書き送った。

この手紙で、猊下に都合三通の手紙を書きましたが、それはそのうち一通でも猊下の手元に届き、フィリピンの我々のレシデンシアで現在行っていること、および行い得ることについて報告するためであります。最初の手紙[3]は、アロンソ・サンチェスがマカオから戻ってこないうちに書いたので（当地にいる者が前進できるという考えに関して）盲滅法のところがありましたが、アロンソ・サンチェスが猊下に対し手紙によってお送りするでありましょう報告から、猊下はこのレシデンシアに関してより適切となるところを御推察いただけるものと思います。なぜなら、たとえこちらにいる八人の会員（五人の聖職者は）、既に他の書簡によって猊下が御承知でありましょう理由によって、スペイン人に対してもまた、インディオに対しても何もすることがないとしても、当地で必要ない会員は、猊下からの早急な命令によって、日本あるいはその他の地域で働くためにマカオに渡ることが適当である、ということが明らかになったと思われます。アロンソ・サンチェスはこの点ポルトガル人パードレとうまくやってゆけないと思っているので、困難があると思っておりますが、私は、恒常的なルートにするためであれば不都合であることは良くわかりますが、こちらにいる何人かがあちらに向かうというような例外的な

ケースのためであれば、少なくとも今回は不都合にはならないと考えております。なぜなら、メキシコに戻るのは適当ではなく、また、全く成果もなく国王の金を消費しながらこちらで過ごす、というよりむしろ、国王の金を使って生活していながら、インディオの教化を担当するということについての国王の良心の重荷を軽減してやっていないという批判を受けながらこちらに残ることもまた適当ではないからであります。（中略）もう既に、その端緒が開かれている扉を中国が全面的に開くことになれば、こちらにいる我々は、東インドを経由して来る者達に劣らず必要になるでありましょう。猊下はあちらで行なわれている全てについて知らせを受けていらっしゃるでありましょうが、あちらに行ったことがあり、パードレ・ルッジェリオが中国でその幸いなる第一歩を踏み出したことに関係を持ち、今回も二度目にそれを見てきて、同パードレと語り合ってきたアロンソ・サンチェスが真実の報告書を作成しました。この二人の祝福されたパードレ達の働きによって我々が期待してきたところのものを改めて確認しました。こう申しますのは、彼らは副王達から非常に丁重にもてなされているからであります。もし、彼らの統治に変化が生じたとしても、パードレ達を好み敬意を払うことに変わりはありません。また、主要な多くの人々やその他の人々が洗礼を求めていますが、国王と我々が会見して、「頭」から開始するまでは、ごく僅かのしっかりした者以外には洗礼を授けなかった、と言っているからであります。これは中国では全てにおいてその統治はその「頭」に完全に従属しているからで、万一国王が改宗するか、少なくとも改宗するものに対して好意を示すようになれば、短期間で中国は福音を受け入れることになることが確実であるからであります。更に中国語の教義（書）があり、既に通訳の必要なしにそれらを伝えております。改宗者の中には、彼らの法律 sus leyes の学者である一人の主要な人物がおり、彼は我々の聖信仰の諸事、特に三位一体と顕現の秘義が、非常に気にいりましたので、受洗後にもう一人のパブロの如く我々の教会の説教壇でそこに集まった多くの人々に主の真実の教えを、彼らの陥っている盲目状態を指摘しながら述べ伝えています。（中略）これらの徴候はいかに早急にこのような麦を刈るための働き手が必要であるかを理解するのに十分な理由となっています。私はそれに値しないのですが、更に一つだけ主に対してつけ加えたいことは、（中国に入国するものは？）派遣

される前に出かけたりせず、また、この事業は、その端緒を開いたイタリア人パードレのものでも、スペイン人パードレのものでも、他のいかなる国籍の者のものでもなく、むしろ、ポルトガル人パードレものであるといったことが会において話されている、というように考えたりすべきではなく、それは聖服従を通じてそのために主が運命付けたもののためである、と考えるべきであるという点であります。このことを申し上げるのは、こちらで我々は残念に思うようないくつかの事を耳にしたからであります。猊下がそれらの事を御解決になりますように主において期待致しております。猊下が、別便でより完ぺきな情報を（得ることと思いますでの）それにゆずります。(4)

ここでスアーレスは、一二日付の書簡を敷衍しながら、四人のスペイン人会員が中国ないし日本布教のためにマカオに渡るべきであることを再度主張している。そして、中国や日本の布教がポルトガル人のパードレのものである、といった考え方に対しても批判を加えているのである。これは後に述べるヴァリニャーノの見解と正面から対立するものであった。

更に彼は、六月一七日付で総会長に宛て、アロンソ・サンチェスとセデーニョに対する批判を認めた書簡を送ったが、その書簡の後半で再びこの問題に触れている。

もしメキシコから命令が出ていないのであれば、我々は一カ所に固まっていないで、我々の仕事と、chincheo出身でこちらにいる現地人商人達の言葉を学習することに従うように、と猊下がお命じになることが適当であると思われます。こちらで我々がしなければならないことのためには、既に他の手紙で書きましたように、そんなに大勢は必要とはしないのでありますけれども、ひょっとしたならば、主はインディオの教化に我々をお用いになる道をなにがしかのところからお開きになるかも知れません。当地で余っている会員は、主が中国の全てに対して中国の扉をお開きになるまで、猊下の御命令によってマカオにいることができるでありましょう。(5)

このような見解をローマの本部に対して披露したのはスアーレスだけではなかった。例えば、ライムンド・プラド(6)は六月一五日付で総会長に書簡を送り、マニラにい

る千から千五百人の中国人と、毎年やって来る中国人サングレイに対する布教は、言葉を習えば可能であると述べた後、万一中国への布教の道が開かれた場合に言葉を学習しておくことは大いに役にたつであろう、と書き送っている。そしてこれはマニラのゴベルナドールも希望しており、多少托鉢修道会士達からの反対があるかも知れないが、それもたいしたことではないであろうと述べている。中国に対しては、ルジェリオが端緒を開いたにもかかわらず、マカオではあまり関心がもたれず、また言葉を知っている者もいないために、彼を援助することができない状態であるから、自分が中国語を習いこの布教のために働きたいと思うと書き送っている。(7)

一方、中国から帰ったアロンソ・サンチェスは、ポルトガル系のイエズス会の布教方針に対して強烈な批判を浴びせ、それが「常軌を逸したことである」と言い、「私はこれまで生じたところが今生じず、現在生じていることがこれから生じないようにするのと交換するのであれば、日本や中国に全く会員がいなくなる方が本当に喜ばしいことであると思う。そして会の全てが一致することを望む。このためには、僅かなより選られた者だけが残るようにするため、土地柄や快楽に慣れ親しんでしまっている者を排除して行く以外に方法はない。そして彼らを精神修養のためにポルトガルやエスパーニャに戻すべきである。このために人員に不足を来たしても仕方がないと思う。ある期間、仕事に不足を来たしても、本来の目的である然るべき人物を養成するためにはこの方法が必要であろう。(8)」とまで書き送っているのであるが、彼自身は積極的な布教活動よりむしろ隠遁生活を会のあるべき姿と考えていたため、中国・日本への布教事業の展開については極めて消極的ないし、曖昧な姿勢をとった。特に日本への進出については、恒常的な航海が存在しないことから否定的な見解であったようである。但し、余分になっている会員が中国・日本に暫定的に渡ることまで否定した訳ではない。彼は中国から戻るとすぐに六月一七日、一九日、二三日、二五日付で都合四通の書簡を総会長とヌエバ・エスパーニャ管区長宛に送付したが、そこでは中国・日本に布教を展開することの是非を全面的に総会長の判断に委ねている。まず六月一九日の書簡では次のように述べている。

マニラに戻ってみると、当地では何もする事がないと

いう情報を受け取ったにも拘らず、メキシコの管区長ドクトール・プラッサは別の三人のパードレと一人のイルマンを派遣してきていました。これは多分、当地にやってきたアウディエンシアの依頼と、日本やマカオ・モルッカ諸島に渡れるという考えによるものでありましょう。しかしながら、既に猊下はお気付きになっていらっしゃることと思いますが、このことをポルトガル人は喜ばないでありましょうし、イエズス会にとっても適当なことではありません。こう申しますのは、あちらの地域はポルトガルの世俗的な統治下にあり、あちらのイエズス会の管区に属しておりますから、あちらに向かう者は、ポルトガルそして（東）インドと（それぞれの土地で）適応をはじめてゆき、彼らのやり方に合わせて行くようにするために、あちら（東インド）を経由して来るべきであるからであります。そうすることによって、平和と統一とが存在することになるのであります。話せば長くなるその他のこれに起因する多くの事柄とともに、小さいとは言えないこの違いが万が一なくなったとしても、これら全てに関し障害となるものは、次のようなことであります。まず、当地から日本への恒常的な航海 viajes ni navios ordinarios はこれまでも決して存在しなかったし、現在も、又将来も存在するとは思われないこと、またモルッカへも現在は全く影も形も見られないことなどが解決されるまでは（相互間の航海）は存在しないでありましょう。またマカオへは大きな危険を犯し、我々にふさわしいような場合以外は（航海）は存在しないでありましょう。これまで（航海が行われ）たのは重大で緊急の事情であったからで、そういった事情でない時に航海が存在する理由はないのであります。（中略：現地人のための布教は考えるべきではないことについて）当地にいるパードレ達は皆、中国についての期待と、国王が多くの資金を費やして当地に我々を派遣し、かつ維持していること、また、良き手本を提供するあるいは司教やこの地の主要な人々から提起される重要な事柄や、疑わしい事柄について我々が援助をする、といった目的以外では、我々がこれほどたくさんこの地にいる必要はなく、二人のパードレと二人のイルマンが布教団の形でレシデンシアにいれば十分である、という意見であります。(9)

次に六月二三日付の管区長宛書簡では次のように述べている。

この書簡では、中国が異なった管区に属している限り、また、そんなことは道理にかなったこととは思われませんが、中国がヌエバ・エスパーニャ管区にいれられるようにならない限り（このことができるとこちらでは考えられております）、こちらを（フィリピン）経由して中国に渡ることはいかに適切ではないかについて、当地でパードレを説得するのに費やした心労と、また、このことを思いきって尊師並びに総会長猊下にすら書き送ったことの心労とについて、尊師にお書きしようと思います。今のところ、モルッカ諸島やマカオに向かう恒常的な航路も船もないこと、及び、日本へは恒常的なものはおろか危険なものすらない、ということが、このことを妨げている最大の点ではありますが、そのほかの不都合のなかでも、日本や中国に行くべき者はポルトガル経由で赴くほうがよいということがあります。なぜならば、かれらは（ポルトガル人の）言葉や習慣に合わせ、適応して行くようになるからで、こちらを経由したのでは非常に違った（やりかたをもってあちらに）行くことになってしまい、何等かの不統一を引き起こすことになります。更には、俗人の間ではカスティーリャ人が彼らを送り込んでポルトガル人が一生懸命にして手にいれたものや、彼らの希望を横取りしようとしていると考えて確執を引き起こすことになるからであります。（中略）これらの全ての不都合、及び、話せば長くなるその他諸々の不都合にもかかわらず、私自身が、主があちらで行なおうとなさっていらっしゃる唯一のことを妨げる原因にはなりたくはありません。総会長がポルトガル経由でのように確実で恒常的な航海が存在しないこと、あちらでは毎年ほとんど欠けることなく、時には二度も確実な航海があること、また、彼の地はポルトガルの世俗的な統治下にあることなどを考慮した上でなお、当地を経由してあるいは当地から（中国や日本に）赴くことができるという命令をお出しになれば、全てを解決することができるということは申し上げておきます。しかし、上述のような状況では、あちら（ポルトガル）経由で赴くほうが自然であり、これはさして重大なことではありませんが、当地から赴くものはあちらから来るものと合わせることができるようになるまでは、何等かの苦労をすることになるのが必然であるということであります。要するに私の申し上げたいことは、もし総会長がこのことを考慮した上で、当地経由で会員が赴くことができると判断なさるのであれば、私が書き送ったことが主のより大きな栄

光を妨げることにならないようにしたいということであります。少なくとも、全然あるいはほとんど何もしていない我々について、今ここにいるのでありますから、その何人かが日本や中国に赴くようにと今回命令されたとしても、それが恒常的なものではなく、この停滞した状況に出口を与えることになりますので不都合であるとは思われないということであります。しかし、このことに関して（こちらでそれを望んでいる者がおりますが）私はそれを求めたりしているとか、あるいは反対しているとか思われたくはありません。そうではなく私はこれについては主の御処置にお任せしたいと思っているのであります。またこのことから尊師は私がこちらからそちらに移ることを求めたのではないこと、そしてスペインにおいてもメキシコにおいてもそのようなことはしなかったことをはっきりと御承知いただきたく思います。なぜなら、私はこちらに派遣して欲しいなどとは決して言ったことはないからであります。私についてそれを欲していなかったといって生じ得る疑いを消していただきたく思います。（中略）ですから、私が申しているのは実際に中国ないし日本に渡ることに関して、確かに私はそれに介入し過ぎており、海を渡ることを恐れているかも知れませんが、私はそれを求めていないし反対もしていないということであります。私が航海するということについては肉体は嫌ってはおりますが、魂は主がいかなる御処置を私に対してなさろうとも、主を賞賛し喜ばせるという私の抱いている望みを達成させてくださるためにそれを心よりお願い致しております。尊師が主に対してその祈りの中で私をおすすめ下さいますように。また、その慈悲をお受け取りになられますように。また、その慈悲でもって総会長に対し、中国や日本に渡るか渡らないかについて、この件に関してお書き下さいますように。そして、私の責任を免じ、これについてなにがしかをはっきりさせることができるかも知れませんので、この手紙を同封してお送りください。[10]

中国・日本のイエズス会に対して強烈な批判の言葉を書き送ったり、中国に対する軍事的征服計画を声高に主張したアロンソ・サンチェスを知る者には、上記の記述は若干不自然な印象を与えるかもしれない。しかしながら、史料を見る限りでは、少なくとも日本に関する限り、アロンソ・サンチェスが積極的に布教事業を展開して行こうと考えていたと取るのはかなり難しいようであ

る。こういったサンチェスの「消極論」は、二度目のマカオ行きに際して、反乱を起こしマカオに向かった船の航海士達を、マニラから派遣されたフェイトールとサンチェスの一行がマカオ港内の船上で処罰したことがポルトガル側の裁判権を侵害したとされ、マカオ官憲及びゴアのインド副王の反発を招いた経験が尾を引いていたとも考えられる。(11)

一方、先述のライムンド・プラドは一五八六年六月二四日にも総会長宛に書簡を送り、総会長からの命令が届かなかったこと、サンチェスの厳格主義に皆が失望しているが、アントニオ・セデーニョは何等対策を取らないこと、自分達は、スペイン人に対しても現地人に対してもなにもすることがないこと、管区長が指示してきたタガログ語ではなく、中国語を学習することが非常に大切であることなどを主張した後、次のように書き送っている。

パードレ・スアーレスと私に対して、院長（アントニオ・セデーニョ）は中国のことを示唆しました。そこで我々はこのことを一生懸命に考え、主と総会長猊下の御命令とを前にしてそれを実行することを考えました。私はここに来て以来、これについて大きな望みを持っていました。と申しますのは、このように我々程あるいはそれ以上に理解力のある多くの人々が、彼らの言葉を知っている者がなく、我々の信仰を伝えることができる者がいないため地獄に堕ちているのを見て、心を痛めていたからであります。修道会士も在俗司祭もスペイン人もいず、ただその初歩だけを知っている一人の在俗司祭がいるだけであります。彼は昨年、私の倫理神学と文法の弟子でありましたが、私に、彼らが住んでいるパリアンに彼が行ったとき、彼らは店から出てきて彼に我々の教えについて非常に多くの質問をして、非常にそれを聴きたがっており、ほとんど力ずくで彼を引き留めた、と語りました。私は自分の好運にとても慰められました。そして長い間私が望んできたことが達成され、それを実行する道が開かれんことを主に心よりお願い致しました。これらの中国人や日本人において期待できる成果を目にするために、これらの人々の間で私を猊下がお使いになる準備を私は既に整えております。また、もしこれが主の栄光と、私並びに私の隣人達の魂にとって利益になるとご判断なされば、このことを従来にも増して心からお願

い致したいと思います。更に前進することについては、日本や中国への通路は恒常的でありますので困難があるとは思いません。猊下がこれが適当であるかどうか御検討下さいますように。こちらを通っての方がインドを経由するよりも健康的でよいものであることは明白でありますが、これについて及び、インドの諸事について救済策を持つために生ずる利益については、別の者が詳細に書き送ると思われますので、猊下はそれにつき情報を得ていらっしゃるものと思います。また、パードレ・アロンソ・サンチェスもあちらの地域にいたことがあるので、もし必要と思えば何等かのことについて書き送るでありましょう。[12]

## 七　ヴァリニャーノの反応

フィリピン諸島のスペイン系イエズス会士から、ローマの本部に対して上述のようにさかんに日本や中国への布教を許可するように求める書簡が送られていた。こういった動きに対して、当時東インドにおけるイエズス会の最高権力者であったヴァリニャーノは、マカオにおいて直接サンチェスと話し合いを行った際には、彼の計画に対して明確には反対の意志表示をしなかった。その後、ヨーロッパに向かう途中インド管区長に任命されたことを知り、彼自らローマに赴くことが不可能になった。そして、管区長としてゴアに滞在中、サンチェスの二度目のマカオ渡来とその行動の報告に接することになった。ヴァリニャーノは、一五八五年四月一日付でゴアからローマの総会長アクワヴィーヴァに宛てて、次のような極めて厳しいサンチェス批判を書き送ることになった。

ここで特筆しようと思われることは次のことであります。フィリピン諸島にいるカスティーリャ人達は中国の富を熱望していたため、俗人と共に修道士を何度かマカオの港に派遣してきました。その町は当時まだ現在のような町の姿を取っていなかったためにいくつかの欠点が存在していたにもかかわらず、そんなことには無頓着に、何人かのカスティーリャ人フランシスコ会士はそこに定住しました。そして今では、アウグスチノ会の修道会士もそうしようと努めています。また、フィリピンの総督は、マカオに勢力を延ばして国王陛下と共にその地を自らの支配下におこうと企てていることが判明しつつあります。このことは、インド領国にとっても、また、

国王陛下に対する奉仕にとっても大いに反することになりますので、インドの副王はじめ、貴族や高位聖職者達は大変に心を痛め、ルソンの総督やその兵士達が自らの利益や欲に駆られて、これらの領国の利益に配慮しないことをさかんに訴え、実際に起こっているところを国王陛下に知らせようとしました。更にまた、中国人はカスティーリャ人に対し大変に危倶の念を持っておりますので、あの港の（マカオ）のポルトガル人がカスティーリャ人と関係し、交易を維持しているのを見れば、ポルトガル人をその港から追放し、ポルトガル人、カスティーリャ人双方を敵と見なすようになるといったことは大いに起こりうるところであります。（そうなれば）その貿易とともに、日本の全てのキリスト教徒と改宗事業も失われることになりましょう。なぜならば、日本人とは中国から赴く船によるものの他、交渉はないからであります。そして同時に、国王陛下の定収入と共に、インド領国は失われることになりましょう。なぜならば、インドに存する最も主要な貿易は中国とのそれであるからであります。こういった訳でありますから、既に述べましたように、ポルトガル人はカスティリャ人による交渉を非常に良くないものと見做しているのであります。カスティーリャ人は国王陛下からの特別な命令もないのにやって来て、囚人を（西？）インドへ送還したので、インド副王は、フィリピンの総督に対し、重大な抗議を申し入れ、マカオの町に対して厳重な処置を施しました。

他の者達同様に、フィリピンにいるイエズス会の会員達も改宗事業に参加したいという望みや、彼らなりに何がしかをやってみたいという望みから、パードレ・アロンソ・サンチェスを二度中国に派遣しました。彼は必要もない色々なことをしようと試み、会にはふさわしからざるように私には思われる精神をもって、私を驚かせる様々な失態をしでかしました。一度目に（マカオに）来た時には私がそこにいたせいもあって、とんでもないことはしなかったのではありますが、今回二回目には、多くの事柄で皆を怒らせることになった hilo を発見いたしました。その妄想的な不思議な精神を以て「新奇な改革者」nuevo reformador となり、当管区のイエズス会は道を外れているものとし、日本の準管区長やパードレ・ペドロ・ゴメスに無鉄砲で、見境のない書簡を書き送り、日本において行われていること全てについて叱責しました。それはたとえ気違いでもそんな書簡は書けないであろうといったしろものでありました。準管区長はそ

の書簡を総会長猊下に送付するために私のもとに送ってきました。それらはあまりにも無鉄砲で、仕様もないものでありますので、こういった不確実な便では送付せず、通常の便で送ることに致します。こういったこのパードレの無鉄砲や無分別によって、この管区全体の大いなる躓きとなっただけでたくさんであります。

フィリピンにいるパードレ自身が、日本やマカオにフィリピン経由で赴くであろうと書き送り、このことは総会長猊下にも報告したと書き送っております。また、このパードレ・アロンソ・サンチェス自身は、その地に残留する目的で Xauquin に入ろうと企てましたので、総会長猊下に対し次のことを書き送るべきであると思われました。即ち、このことは不都合な事であり、絶対に実行してはならないし、万一実施されたりすれば、この管区に重大な不統一と、躓きとを引き起こすことになり、それは会の内部の者からも、外部の者からも大変に悪くとられることになる。こういった混乱を当管区に生じさせることは道理に叶ったことではない、ということであります。従って、猊下からヌエバ・エスパーニャの管区長や、フィリピンの院長に対し次のように命じていただきたく存じます。即ち、いかなる場合であっても、そちらの管区からこちらの管区・マルッコ、中国、日本、その他当管区とその征服に属するいかなる地へも、パードレを派遣することのないようにと。当地にも会のパードレはおり、(フィリピンからのパードレが)この地でできるようなことは、我々の管区でありますから、我々自身でもっときちんとすることができるのであります。スペインから来なければならない人員も、割れ目 frestras からではなく「扉」から入って、正規のポルトガル経由でくるべきであります。イエズス会は、もし彼らがあちらからこの管区にやってくるようなことになることから生ずるであろう紛争や無分別などではなく、常に平和と統一とに努めるべきであります。

こういった仕事はとても大切でありますので、それについて、ルソンのレクトールのパードレ(アントニオ・セデーニョ)にも私は書簡を送りました。また、この管区で秩序ない行いが生じないようにするため、これを総会長猊下にもこの便で書き送ろうと思いました。ですから、総会長猊下がパードレ・アロンソ・サンチェスをお叱りになったことは適切であったと思います。なぜなら、彼はたしかに大変に霊的に勤めを果たしてはいますが、私は彼の精神性に満足はしてはいないからでありま

す。無論、私はそれを断定は致しませんし、そうすることは、私の職分でもありません。しかしながら、彼の精神は極めて独特なもので、会の制度からかけ離れたものであるように私には思えます。また、自惚れが強く、無分別でもあります。こういった車輪の上に、会の真実の精神の車はうまく乗せ得ないと私は考えます。更に、彼が書き送った書簡も、十分な罰と叱責に値すると存じます。しかし、いずれにせよ、総会長猊下はそれを私よりもよく御存知のはずで、適切な処置をお採り下さるものと思っております。(13)

また、この書簡にも言及されているように、ヴァリニャーノはフィリピンの上長アントニオ・セデーニョにも同趣旨の書簡を、その一週間後の四月八日付でゴアからマニラに向けて送付している。彼はまず、東インド布教の概要と日本・中国布教の状況、特に Xauquin における布教活動について細かく伝えた後、本題に入り、二つの問題点を指摘している。第一点として、カスティーリャ人がマカオに来ることはポルトガル領インド領国の崩壊につながること。特に、サンチェスの二度にわたる中国入国は、彼の無分別さから重大な問題を引き起こしていること。第二点には、フィリピン経由でイエズス会の会員が中国や日本に渡るべきではないこと、を指摘している。但し、最後にスペイン人に対する個人的な感情からこれらの考え方を示したのではないことをさかんに弁解している。

この手紙で特にお書きしたいことは、尊師に次のことをお伝えすることであります。フィリピンの総督がマカオのカピタンに送った通告は、当（ポルトガル領東インド）領国の副王・貴族・聖職者の心を痛めました。そして何度もそちらからカスティーリャ人がマカオの港に来ることにつき、（カスティーリャ人が）いつかは（自分達は）中国に入るようになると言っている、と言いたて、大変に悪く取りました。なぜなら、彼の港（マカオ）を維持することは、マラッカとインドがこの貿易によって維持されているのでありますから、この領国全体にとって極めて重要で、また日本のキリスト教界全体の運命がかかっているものでもあるからであります。中国人はとても感がよくかつ、非常に疑い深いため、ポルトガル人とカスティーリャ人の間に交渉があるのを見ればとても悪くとり、ポルトガ

ル人をあの港から追放してしまうでありましょう。このことはまた、日本のキリスト教界の崩壊と、国王陛下のマラッカ・インドにおける公設市場 Alhondigas の崩壊を意味することになりましょう。従って、もし仮に中国の港にやってくるスペイン人が多くなかったとしても、それは非常に悪くとられるのであります。何度も中国の役人達はこの件に関して厳しく言及し、死罪をもって（スペイン人の）渡来を禁止したのであります。

更に俗的な統治については、副王がこの件をフィリピンの長官や国王陛下と協議することでありましょうから、私はイエズス会にとって適切であると思われる点につきここで論じようと思います。と申しますのは、会員は皆一体となってはおりますが、正当な理由から、会はいくつかの管区に分けられており、それぞれの統治においては国家を侮辱したり、国民に躓きを与えたりしないように注意が払われております。そして、この（インド）管区は、そちらの（ヌエバ・エスパーニャ）管区とは分けられなければならず、ポルトガル人はそちらからカスティーリャ人が彼らの管区にやって来ることを非常に不快に思っておりますので、パードレ・アロンソ・サンチェスが中国に二度やってきたことを知り、たいへん不快になり、会員に対して感情を害しております。また当管区のイエズス会はポルトガル国家のものであるべきで、ポルトガル人が会のために多くの資金を提供してくれたので多くをポルトガル人に依っているのでありますから、そちらの管区のパードレによって彼らに対して躓きや不平の機会をもたらすようなことがあってはなりません。尊師も御存知のように、この二つの国民の間には古くからの、ほとんど生まれつきの不和が存在します。また、この管区はその中に多くのスペイン人がおり、色々の国民からの合併に依って成り立っていますから、しかるべき平和と統一を守るために、十分慎重にことを進める必要があります。

以上のことが私がこの管区の統治においてこれまで常に望み、かつ現在も望んでいる最大のものであります。なぜなら、たとえ主の恩寵のおかげで今日までこの管区では、国家の違いや区別無く、平和と平穏とのうちに我々全員が主のもとに一致していますが、この統一を維持するためには、極めて慎重に行動する必要があります。にもかかわらず、パードレ・アロンソ・

サンチェスは、その慎重さに欠け、大変に特殊な精神によってこれとは正反対のことを行ないました。彼は当管区のマカオの港に到着し賓客として愛情をもって受け入れられたにもかかわらず、この管区の改革者・巡察師として振舞おうとしました。彼は当管区が彼の特別な考え方に従っていないと感じ、彼のカーサの行動の仕方について公の席で叱責を行なったのみならず、あちらにいた性格・徳ともに優れた人々に対し敬意を払わず、彼の精神に基づいてその管区を変えようとしました。パードレ・アロンソ・サンチェスは、日本の維持のためにある種の貿易が行なわれているのを知り、退会させられるために日本からインドに向った一人のイルマン（ガスパル・マルティン）、彼はその後実際に退会させられた、と話をして、そのあまりにも慎重さに欠けた精神をもって、躓きを引き起こし、日本やこの管区で実際に生じているところを全く知りもしないのに、また、日本のためにマカオで行なわれる貿易が総会長猊下とその顧問とによって調査され承認されているばかりでなく、猊下が教皇に実状を報告し必要から行なっていることとして、「これは貿易とは呼べないし呼ぶべきものでもない」という言葉とともに承認されていることも考慮せず、この管区を迷わせ破壊しました。そして、日本準管区長にその他の慎みのない躓きの多い恐ろしい手紙を書き送り、日本と当管区で行なわれていること全てを、日本とこの管区の会員を躓かせるようなひどい怒りの言葉で批判し叱責しました。

そのような手紙や言葉は、妄想にとりつかれた者でなければ決して書いたり口に出したりできないものであることは明かです。それらを私は総会長猊下に送付するためと、彼に対し然るべき罰を与えるため、今所持しております。彼とはマカオで彼と交渉した時に、その並外れた妄想的な精神を知りました。ざっくばらんにそれにつき彼を非難しました。彼が他の管区についても同じような考えを抱くのが常であることを知っております。彼は私に対して、彼によって教化と改革の手本が与えられるまで、いかにヌエバ・エスパーニャ管区が踏み誤っていたかを語りましたが、私には大した印象は与えませんでした。しかしながら彼の無謀さから、他の者を余りにも酷く躓かせずにはおきませんでしたので、彼らは公然と私に対して、この管区にルソン経由で会員がやって来るのを認めないで欲しい

と要請してきた程でありました。更に彼は、主の恩寵により今まで治癒されてきた古傷を再び広げないではおきませんでした。

こういった訳で次の理由から、これら全てを尊師にお知らせするのが適当であるように思われました。まず第一に、パードレ・アロンソ・サンチェスの精神がかくなるものであり、果実からその樹木を知ることができるので、偉大なる精神性の下に、イエズス会の真実のそして本来の精神に相反する教義を広めないように尊師に良くご注意いただきたいからであります。彼自身が持っていると言っている、偉大な興奮と聖的統一とは、彼の軽率さ、無分別、他の者からの批判と、自らの自惚れなどとは合致しないものであります。なぜなら、日本や当管区で生じていることを全く見たことも、知識もなく、また、この管区には有徳で慎み深い、会での統治経験のある人々がいることにも配慮せず、実際に彼がこれらの書簡の中で書いていることは、例えようもないほどに軽率で慎みのないことであるように思われます。特に、初めて与えられた職務がカスティーリャの最も小さいコレヒオの一つであるといった、会の統治における実績の殆どない人物であり、その職務も彼の精神につき良く御存知であった故総会長エベラルド・メルキュリアンが即座にその職務から解き、罰としてある学校で三年間文法を教えるようにさせたといった程度のものでありました。

この手紙を書いた第二の理由は、既に述べたような諸々の点から、こういったことをどんなにポルトガル人が悪く取るか、そして、この管区に何らかの不和や不統一を引き起こす原因となる危険があるかということを知っていただきたいからであります。尊師やその他のそちらで統治を行っている方々は、そちらにいるパードレも、また、これからルソンにやって来るであろうその他のパードレも、そちらから、日本や、中国、その他当管区のいかなる地域であっても、それらの地に向かうことは不都合であることを認識していただきたい。会と当管区のために尊師に次のことをお願いする次第であります。即ち、仮に使節という形であったとしても、あるいは、そちらの総督、司教からの懇請や要求に従ってその他の任務を帯びているという形であったとしても、当管区のために教皇聖下に提示される諸事由を総会長がお聴き及びになって、何等かの特別な許可や命令が出されるような場合でない限

り、パードレを（日本や中国に）派遣すべきではないということであります。こう申し上げるのは、もしこれに反することが行われるような場合には、そちらから派遣される者はここゴアに来させるようにする必要がありますし、そちらの管区にとっても、またこちらの管区にとっても、主がお喜びにはならないでありましょう多くの蹟きをもたらすことになるからであります。我々会員は一つの体の一部分であり、会のパードレ・イルマンとして、大きな統一と慈悲とでもって堅く結ばれているのであります。

こう言ったからといって、カスティーリャ人のパードレやイルマンが当地にやって来る事それ自体が当管区では望まれてはいない、というようにはお思いにならないでいただきたい。むしろ、彼ら（がやってくることを）期待しておりますし、（彼らに対して）とても愛情を抱いております。そして、我々は何度となく総会長に対して全ての管区から、特にスペインの諸管区から人員を我々のもとに派遣して欲しいと要請しております。そして事実その様になっております。従って、現在、当管区には三〇人以上のスペインの管区出身者が居ります。そして今年もその他の者とともに三人、また、去年も三人が（スペインの管区から当管区へ）やって来ました。また私がこの管区の巡察に来たときには、一遍に二五人も（スペインから）連れて来ました。こういったところから、尊師方は、当地で皆がそう理解しているように、私がどんなにカスティーリャ人パードレやイルマンの友人であるのか、また、当管区で彼らがどんなに求められているのかを御理解いただけるものと思います。この管区では彼らは皆大変好かれており、愛されております。また、彼らの能力や才能に応じて当管区のいろいろな職務や仕事に就いております。主のお慈悲でもって彼らは満足して生活し、（それぞれの職務を）遂行しております。そこで当然大変好かれ、愛されているのであります。結局、望まれることは、彼らをスペインからポルトガルそしてインドへと派遣することで、彼らが「通常の扉」から（こちらへ）やってくることなのであります。そうしなければ、既に述べたように大変悪くとられてしまうからであります。

また、私が（スペイン人に）愛情を抱いていることは、スペインでも、また、こちらでも周知の事柄でありますから、この件に関して尊師に思うところを忌憚

なくお話ししました。それは、そうすることがこの管区と、会員の統一にとって適切なことであると考えたからであります。主が時と共に障害をお取り除きくださり、いかなる場所においても然るべき慈悲を以て我々を御援助下さいますように。[14]

ここでヴァリニャーノは、サンチェスのマカオにおける行動、特に日本の布教事業に対するサンチェスの批判に及ぶとほとんど激情に流され、個人的な中傷とも取られ兼ねない事柄にまで筆を滑らせているが、それを抑えながら懸命に「理詰め」で説得を試みている様子が感じられる。ヴァリニャーノは、サンチェスに対しては容赦ないが、スペイン人に対しては愛情を持っていることを繰り返しながら、日本や中国における布教事業は無論のこと、東アジアのポルトガル領国全体の存続自体がかかっている日本と中国の貿易活動を侵害しないようにするために、ポルトガルの国家的な利益を守ることが必要であることを訴えているのである。ヴァリニャーノがこの書簡でも言及しているように、彼自身はじめてポルトガルを経由して東インドに向かうに際し、多数のスペイン人会員をリスボンから東インドに同伴しようとして、ポルトガル側及びポルトガルイエズス会首脳部の反感をかい、大きな困難を経験している。[15] その時の彼の行動は、おそらくローマの本部の意向を受けてのものであろうが、ヴァリニャーノはその後もスペイン人会員の日本派遣については決して消極的であったとは言えない。従って、彼の関心はポルトガルの国家的利益そのものの確保と言うよりも、布教の財政基盤確保であったと言えよう。ここにヴァリニャーノの現実的・合理的な面がはっきりと現われていよう。彼にとってポルトガルの国家権益は手段であり、決してそれ自体が目的ではなかったと思われる。とまれ、かつてポルトガルにおいて反感を買いながらも、イエズス会の国際性ないし超国家性を実現しようと試みたことがあったヴァリニヤーノであったが、ここでは「当管区のイエズス会はポルトガル国家のものであるべき」とまで書いている点から、彼の考え方の変化を見ることができるであろう。もっとも、多くの批判を受けながらも、確固とした信念を持ちやっとの想いで確立したマカオ長崎貿易への参加による日本布教のための財政基盤や、日本布教方針に対してサンチェスの批判が及んだ点になると、ヴァリニャーノはほとんど感情的になり批判を展開している。

ところで、マニラのスペイン系イエズス会士の中国・日本布教志向を前に、ポルトガルの国家利益をスペイン側が侵害したために、その希望を放棄するように求める、という点に関しては彼の議論は明白で断固たるものがあるが、他方宣教師の国籍という面では、彼の議論は奇妙に生彩を欠いている。それは、修道会としての理念と現実の国家の壁の中での、ヴァリニャーノの苦悩を示しているとも言えよう。もっとも、フィリピンから中国・日本を志向している会員は、彼が当面の攻撃目標に据えたアロンソ・サンチェスよりむしろ、スアーレスやプラドであったことにはヴァリニャーノは気付いてはいなかったようである。

注

(1) Archivum Romanum Societatis Jesu, Roma. Philippin 9 ff. 42–45v.

(2) Ibid., ff. 44v–45.

(3) Ibid., ff. 39–40v（一五八五年六月八日付マニラ発エルナン・スアーレスの総会長アクワヴィーヴァ宛書簡）

(4) Ibid., ff. 46–47v.

(5) Ibid., ff. 59–59v なお、f. 59v の欄外には「当地にいる我々会員は、適当な時期に日本や中国で働くために一部分はマカオに行くことができる」という注記がある。

(6) プラドは早くから中国行きを総会長に申請していた人物であり、ローマ側も彼の希望に沿うように尽力していた。Felix Zubillaga S. J. Monumenta Mexicana vol. 2, Roma 1959, pp. 57–58（一五八二年三月三〇日付ローマ発総会長アクワヴィーヴァのフアン・デ・プラッサ宛書簡）

(7) Philippin 9, f. 48.

(8) Ibid., ff. 61–66 v,（一五八五年六月一七日付マニラ発アロンソ・サンチェスの総会長アクワヴィーヴァ宛書簡）

(9) Ibid., f. 68（ff. 67–68 v）なお、同書翰の欄外には多分ローマでのものと思われる、書翰の要約が書き込まれている。訳出部分に関する要約は「航海がないので日本やモルッカに渡る目的であちらに留まる必要はない」とある。（f. 67 al margen）

(10) Ibid., ff. 70–70 v この書簡には「グアハカにて一五八六年二月一日に受け取る。」（f. 70 v）「総会長にご覧いただくためマニラよりアロンソ・サンチェス」（f. 71 v）と記入されており、本人の希望通りヌエバ・エスパーニャからローマへ転送された事が分かる。

(11) Ibid., ff. 88–88 v（一五八六年六月二三日付マニラ発エルナン・スアーレスの総会長アクワヴィーヴァ宛書簡）また一三〇ページに引用したヴァリニャーノ書簡も

参照のこと。

(12) Ibid., f. 77 v.

(13) Archivum Romanum Societatis Jesu, Roma. Jap. Sin 10 I ff. 25v-26, Joseph Wicki S. J. Documenta Indica vol. 14, Romae 1979, pp. 7-11.

(14) Jap-Sin 10 I ff. 27v-29
Documenta Indica vol. 14 pp. 17-23
J. L. Alvárez-Taladriz, "De cómo el visitador Valignano se pasaba de raya para guardar la de demarcación portuguesa",『天理学報』118, pp. 212-217.
一方、セデーニョはこのヴァリニャーノの書簡を「一種の脅迫」とすら受け取っていた。「インド管区長は理性や説得だけではなく、ある意味で脅迫をもって、当地から日本やマカオにいかなる人物も渡らないように書き送ってきました。」(Jap-Sin 10 I f. 154, Alvárez, Ibid., p. 218 (一五八五年一月二八日付マニラ発アントニオ・セデーニョのガスパル・コエリョ宛書簡)

(15) Joseph Wicki S. J. Documenta Indica vol. 9, Romae 1966.